

# ひと・ネットワーク

216

当事者と家族が希望を持って生活ができるように

高次脳機能障害・横浜友の会「はばたき」事務局長 長井祝子



高次脳機能障害・横浜友の会「はばたき」

は1999年12月に設立しました。

脳血管障害、脳炎、頭部外傷等で一命は取り止めたものの、脳に大きなダメージを受け、高次脳機能障害の後遺症に悩む当事者と家族の会です。「はばたき」の会として、当事者と家族のために臨床心理士の先生をお迎えし、認知リハビリ教室、音楽療法士の先生をお迎えして音楽に親しむ会、ポッチャ大会を定期的に開催しています。また高次脳機能障害をより理解するために、勉強会や講演会を適時開催しています。

設立当時、高次脳機能障害はまだまだ社会に知られていませんでした。10年ほど昔と言われますが、最近はテレビ、新聞、マスコミ等に取り上げられたり、当事者自身や家族が執筆した本が出版されたりと、社会に広く知っていただけているのではと思っています。おかげさまで高次脳機能障害だからといって、福祉サービスが受けられないという状況も改善されてきていると思います。高次脳機能障害は障害が多岐にわたり、年齢も幅広く、それぞれにあった福祉サービスやリハビリ、医療、就労等が受けられるように、介護者は家族が突然障害者になり、まるで出口のないトンネルに入ったような暗たんたる思いで、日々介護に追われています。

身体的にも肉体的にも、介護者のケアは切実な問題です。当事者と家族が希望を持ってあたり前の生活ができるように、微力ですが社会に訴えていきたいと思っています。

一日平均五名の利用者と、三名のスタッフで活動し、本人の社会復帰を目指しています。記憶力の低下や仕事の計画を立てることが難しいこと等により、受傷前のように作業が行えず、働くことが難しくなりますが、写真付きで配膳や調理の仕方など、作業手順の分かりやすさを配慮し、本人が主体となって活動を行います。「本人が、自分の力でできたという成功体験が、これからの生活で大切」と千葉さんが話すように、活動を通じて、周囲とのコミュニケーションの仕方を学ぶことや、

作業を続ける体力・集中力があるかなど、自分のできることが何かを理解することで、症状が改善されたり、就職に結びついたりするなどの変化が見られました。千葉さんは「基本的に市内の方

作業を続ける体力・集中力があるかなど、自分のできることが何かを理解することで、症状が改善されたり、就職に結びついたりするなどの変化が見られました。



作業工程を図式化することで、作業がしやすくなる

が利用対象で、受け入れ数にも限界がある。待機者や近隣市町村から利用希望の問合せもあることから、必要としている方が地域に埋もれているのでは」と指摘します。

## 知識を共有し支援者の広がりを

ゆるりりのように高次脳機能障

害の特性を理解し、支援することができるとされていますが、作業所や必要とされていますが、作業所やホームヘルプなどの既存のサービスが、高次脳機能障害について理解を深めていくことも求められています。高次脳機能障害と伝えただけで、サービス利用を断られた

こともあり、相談支援事業所から、本人の状況や配慮する点などを伝える工夫をしているそうです。千葉さんは「本人へのきめ細かな支援のために、事業所同士が相談し合える関係を作り、既存のサービスを上手く活用していくことが必要」と言います。

まずは社会の中で、関係機関が知識を共有し支援者が広がり、地域社会の中で本人・家族が安心できる相談場所が広がっていくこと、居場所づくりを進めていくことが大切となっていくのではないのでしょうか。

(企画調整・情報提供担当)